様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　1 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０８３５
研究課題名（和文）　初任期教師の国語科実践的知識の研究

研究課題名（英文）　A Study on the beginning teacher's practical knowledge of Japanese language

研究代表者
松崎　正治（MATSUZAKI　MASAHARU）
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：２０２１９４２１

研究成果の概要（和文）：初任期教師の成長を国語科授業の実践的知識の獲得とその成長という観点から探究した。結果は、以下の通りである。①初任期の 1-3 年目の教師は、授業ルーティンを確立し、その上に授業デザインと授業遂行の技術を習得する。また、子ども理解を深め、子どもとの関係づくりに慣れていく。これらを初任者研修指導教員などのメンターが支えている。②教師の初任期から中堅期への移行期である 6-8 年目においては、学校で中核的な働きを求められる中で、同僚性を深め、学校全体の中での自分の動き方や位置づけが明確になる。③6-8 年目においては、これまでの自分の授業観、学習者観、学習観を変化させていく契機がある。

研究成果の概要（英文）：I searched for the beginning teacher's practical knowledge of Japanese language from the viewpoint like acquisition and the growth. The result is as follows. ①At first the teacher of year 1-3 establishes the lesson routine and acquires the technology of the lesson design and the lesson accomplishment. Moreover, the child understanding is deepened through the lesson. The mentor are supporting these. ②The teacher deepened the relationship of colleague in her school and the positioning in her school during year 6-8. ③There is an opportunity when the teacher chenge the viewpoint of lesson and the viewpoint of learner and learn during year 6-8.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 2009 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2010 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：小学校教師、初任期、反省的実践家、力量形成、国語科、授業スタイル、インタビュー、同僚性

## １．研究開始当初の背景

（１）技術的熟達者から反省的実践家モデルへ

従来の教師教育研究においては、カリキュラムを使用する側としての教師を念頭に、教育実践は授業の科学的原理や技術の合理的適用であり、初心者を技術的熟達者へと育てることを想定してきた。すなわち、教科書と標準的な年間指導計画をもとに、授業の法則性に即していかにうまく教えるのかということに年々熟達していく直線的成長モデルとして、教師の力量形成は考えられてきたのである。そこでの教師は、公的な枠組みでのカリキュラムに即した《教材の伝達→知識の記憶→評価》というサイクルの授業を行うものとされてきた。これは、教える側にとっての制度的な構想として、カリキュラムをとらえる見方に立っている。

それに対して、カリキュラムを教師と子どもとの創造的な活動とともに生成発展するものであり、学習者の学びの履歴であるととらえ、教師をカリキュラム創造のデザイナーとして考える教師モデルの考え方も登場してきた［佐藤（1996）］。このモデルは、学ぶ側にとっての意味を表現するものとしてカリキュラムをとらえる見方に立っている。その実践は、教材の伝達や知識の記憶を学びとするのではなく、人類の文化を自分なりに意味づけ、教師と共に探究し、新たな価値の創造へと飛躍していこうとする。そのために教師は、教育実践における複雑かつ複合的な問題を省察と熟考によって解決に導いていく専門的力量が必要とされる。教師は、変化する実践状況の中で、直面する状況に応じて行為しながら、次の行為への思考や判断を行っている。そういう「行為の中の省察」（reflection in action）を行い、実践的認識を深めていく教師をショーン（2001）は、反省的実践家（reflective practioner）と呼んだ。反省的実践家は、直線的に成長するのではなく、教師としてのライフコースで大小の成功や失敗を重ねつつ、いわば、らせん的に力量を形成していく。これからの教師は、反省的実践家としてカリキュラムをデザインし実践する力量が求められよう。

これまでの反省的実践家としての教師教育研究は、佐藤・岩川・秋田（1990）のように、反省的実践家の実践的思考様式の特徴（即興的な思考や文脈的な思考など）を明らかにする研究が出発点であった。さらに、藤澤（2004）のように、面接調査などから、生徒制御技術（褒め方叱り方のコツなど）や生徒行動理解（人間関係など）、情報提示技術（板書の仕方など）、教育課程理解（教科の目標など）、自己管理技術（時間のやりくりの仕方など）など、授業づくりの一般的な観点から反省的実践家の学習指導の力量形成を明らかにしようとする研究が続いた。

（２）初任期・教科の実践的知識

しかし、そもそも反省的実践家としての教師は授業の中で「行為の中の省察」を行い、実践的認識を深めているのであった。そうであるなら、授業の経験そのものを詳細に分析し、そこで用いられる実践的知識を明らかにしていかないと、反省的実践家としての教師の力量形成過程は見えてこないだろう。

教師の実践的知識の研究は、英米圏の授業研究や教師教育研究において、カーター（Carter　1990）のレビューに見られるように、現在有力な研究動向となっている。また日本でも、教師の実践的知識に関する理論的考察（佐藤　1997）や、その実証的探究の試み（秋田　1998）が現れている。ただし、現状では、具体的な授業にかかわる実践的知識の探究は、これからの研究課題である。

また、教師のライフサイクルにおける初任期は、山崎（2002）によれば、入職後のおよそ十年間。思い描いていたイメージと異なる

現実にショックを受けながらも、試行錯誤しながら無我夢中で実践を行い、次第に自己の実践課題が明確となり、教師としてのアイデンティティが確立されていくまでの時期だと言われる。この初任期は、職場の同僚に支えられながら成長していく時期であるが、これから十年ほどは、団塊の世代の大量退職で、これまでの教師教育システムでは、対応できなくなるおそれが強い。

そこで、本研究では、小学校教師の初任期に光を当て、さらに具体的な教科（国語科）の授業場面における実践的知識を分析することで、初任期の小学校教師が反省的実践家として国語科における実践的知識を形成していく様相を明らかにしていきたい。

## ２．研究の目的

１で述べた背景を踏まえつつ、本研究は、初任期の教師の成長を次の観点から明らかにしようとした。

（１）　国語科の授業を行う際に、どのような実践的知識を用いるのか

（２）　授業経験を通して、その実践的知識をどのようにして成長させていくのか

## ３．研究の方法

従来の教師教育研究では、「授業の目的とする能力形成や教育内容習得に、手段としてどのような教材や学習活動が有効か」という《目的―手段関係》を、どの教師にも通用する時空を超えた一般的な技術原理として研究する傾向が強かった。こうした研究に対して、1990 年代から「特定の教室に生起する個別具体的な経験や出来事の意味の解明」（佐藤 1996、p.122）を指向する教師教育研究が提起されるようになってきた。そもそも授業は、教師が経験の中で形成してきた状況依存的で個性的な実践的知識によって創られている。したがって、ある授業が成立してくる個別具体的な必然性に焦点化して、教師の個人誌（バイオグラフィ）にさかのぼりながら通時的に授業を研究することが必要になる。そのことによって、初任期の教師が反省的実践家として、力量形成していく過程を事例的に研究することが可能になる。

このような立場で教師教育研究を進めていく本研究においては、国語科の授業スタイルの変容に着目する。授業スタイルとは、教師が授業を構想したり実践したりする際に、学習者理解、授業目的や教育内容の設定、教材や学習活動の選択と組織などをどのように遂行していくかの個性的な様態のこととしておこう。したがって、授業スタイルは、実践的知識の一側面でもある。この授業スタイルは、個々の教師の授業実践史の中で形成され変容してきたものであり、歴史性を帯びている。

そこで、教師の授業スタイルの変容を歴史的な二つの視点から捉える試みをする。

第一は、インタビューや実践記録などから、教師の《ライフヒストリー》から、巨視的に捉える視点である。

第二は、教師の《カリキュラム経験》から、微視的に捉える視点である。《カリキュラム経験》とは、教師が授業を構想し、子どもたちと共同的に活動しながら、子どもたちとの学びの履歴と出会っていく経験としておこう（藤原・遠藤・松崎　2006）。近年のカリキュラム論がいうように、カリキュラムとは「教師が組織し子どもたちが体験している学びの経験（履歴）」（佐藤 1996、p.4）である。したがってカリキュラム経験も、教師が授業を構想するという一方向的なものではなく、学習者としての子どもたちと共に生成していく過程だととらえる。

これらの二つの視点から、初任期教師の授業スタイルの変容を明らかにし、国語科実践的知識の研究を進めていった。

## ４．研究成果

小学校での教職経験３年未満の教師、６年目から８年目の教師が、反省的実践家として、力量形成していく過程を国語科の授業分析を通して事例的に研究した。つまり、初任期に入ったばかりの教師と、初任期を脱しようとしている教師の事例を対照的に検討した。その結果、以下の点を明らかにすることができた。

（１）初任期の教師が抱える問題は、佐藤（1989）も言うように、大きく次の三つに集約される。

①子どもに対する理解と対応の経験と技術の不足

②子どもの学習を想定して教育内容と授業を方法的に構成する経験と知見の不足

③自身の授業を自己診断し、改善の道を発見する力の不足

これらの問題に対応するために、教師の初任期の 1-3 年目においては、第一に、教師の授業ルーティン（教師と子どもの間で約束され、定型化された一連の教室行動）を確立しようとする。例えば、授業中の話し方や聞き方の約束事である。その基盤の上に、授業をデザインし、円滑に授業を遂行する形式や技術を習得していく。

第二に、授業や教科外指導を通して、子ども理解を深め、子どもとの関係づくり、子どもの組織としての学級づくりの知識や技術を学んでいく。これらは、授業の円滑な運営と関連していく。また、子どもの背後にいる保護者との関係作りの方法と技術を学んでいく。

第三に、これらを次のようなメンター（経験を積んだ専門家）が、サポートしている。初任者研修の指導教員、学年を同じくする同僚（学年団）の教師、また職場の熟練した同僚教師や管理職である。これらの同僚だけではなく、卒業校の大学教師や研究会の講師、他校の先生などの所属校外の非公式ネットワークを通じたメンターである。これらのメンターによって、自分の授業の改善の方途を学んでいく。

こういう三つの課題の克服を通して、初任期の最初のおよそ三年で、一通りの実践的知識を確立していく。

（２）教師の初任期から中堅期への移行期である 6-8 年目においては、学校での様々な校務分掌において中核的な働きを求められるようになる。その中で、同僚性を深め、研究的な観点を深めていく中で、学校全体の中での自分の動き方や位置づけが明確になってくる。

（３）さらに、移行期である 6-8 年目においては、これまでの自分の授業観、学習者観、学習観を変化させていく契機がある。それはこれまでの自分の授業に対する不足感であったり、特定の指導困難な児童との出会いであったり、学校で取り組む研究課題で合ったりする。これらの課題を授業の中で見つけ、様々なメンターにアドバイスされる中で、授業を変えていくことができる。

### ◆文献


秋田喜代美 （1998） 「授業をイメージする」浅田匡・生田孝至・藤岡完治（編）『成長する教師―教師学への誘い』金子書房

Carter, K.（1990） Teachers’knowledge and learning to teach. In *W.R.Houston(ed.), Handbook of research on teacher educa-tion.* Macmillan.

藤澤伸介（2004）『「反省的実践家」としての教師の学習指導力の形成過程』風間書房

藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治（2006）『国語

科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ―遠藤瑛子実践の事例研究』溪水社
佐藤学（1989）『教室からの改革』国土社
佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美（1990）「教師の実践的思考様式に関する研究（１）―熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に」・『東京大学教育学部紀要』第 30 号
佐藤学（1996）『カリキュラムの批評―公共性の再構築へ』世織書房
佐藤学（1997）『教師というアポリア―反省的実践へ』世織書房
ショーン, D.　佐藤学・秋田喜代美訳（2001）『専門家の知恵―反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版
山崎準二（2002）『教師のライフコース研究』創風社

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①□松崎正治、観の変化が授業スタイルの変化を促す―荻原伸氏の授業スタイル、授業づくりネットワーク、査読無、23(10)、2010、14-17

〔学会発表等〕（計１件）
①□松崎正治、初任期から中堅期へ移行していく時期の教師の実践的力量形成過程の研究、教科教育理論研究会（2011 年３月例会）発表資料、2011 年３月 28 日、京都市

６．研究組織
(1)研究代表者
松崎　正治（MATSUZAKI　MASAHARU）
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：２０２１９４２１